

様 式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19（共通）

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書



令和 5 年 6 月 28 日現在

機関番号：33805

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2021～2022

課題番号：21K21267

研究課題名（和文）大学生のスポーツボランティアに対する他律的な認識の形成理由

研究課題名（英文）Reasons for the formation of a heteronomous perception of sports volunteerism among university students

研究代表者

清宮 孝文（Kiyomiya, Takafumi）

静岡産業大学・スポーツ科学部・講師

研究者番号：30773808

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,400,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究は大学生がどのような経緯でスポーツボランティアに対して他律的な認識を持つのかを明らかにするため、3つの仮説（メディアによる影響、教育による影響、日本の風土による影響）を検証することを目的とした。アンケートによる2つの量的調査を実施した結果、調査対象者のうち、約2～3割の大学生はスポーツボランティアに関する報道や学校教育における強制的なスポーツボランティア活動の影響で他律的な認識を有したことが示唆された。また、アメリカの大学生と日本の大学生を比較したところ、スポーツボランティアに対する認識が両国で異なることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

スポーツイベントやスポーツ指導の現場では、スポーツボランティア人材の不足に悩まされているところが存在する。このような背景から、強制的に高校生や大学生をスポーツボランティア活動へ動員しているケースも少なくない。本研究では、メディアや学校教育の影響によって、スポーツボランティア活動に他律的な認識を持った大学生がいること、またスポーツボランティア活動への利己的な認識が特に参加意欲を高める可能性が示された。今回の知見は、運営側の募集方法やボランティアマネジメントに役立つことが期待される。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to test three hypotheses (influence by media, influence by education, and influence by Japanese culture) in order to clarify how university students develop a heteronomous perception of sports volunteerism. The results of two quantitative surveys using questionnaires suggested that approximately 20-30% of the surveyed college students had a heteronomous perception of sports volunteerism due to the influence of media coverage of sports volunteerism and mandatory sports volunteer activities in school education. In addition, a comparison of American and Japanese university students revealed that perceptions of sports volunteerism differed between the two countries.

研究分野：スポーツ社会学，スポーツマネジメント

キーワード：スポーツボランティア 他律的な認識 大学生 メディア 学校教育 日米比較 量的調査

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 1. 研究開始当初の背景

スポーツボランティアの定義として、山口(1998)は「個人の自由意志に基づき、その知識・技能や時間などを進んで提供し、社会に貢献すること」と示している。しかし、清宮・依田(2019)では、大学生が運動部活動で強制的に行った活動や大会組織などから依頼を受けて参加した活動をスポーツボランティアと認識していることが明らかになった。また、スポーツボランティア活動への参加動機に関する研究(松本, 1999; 田引, 2008; 小玉, 2016)では、「他律参加」や「依頼」などの他律的な因子が抽出され、スポーツボランティア活動は他律的な参加が常態化していることが示唆される。

このような他律性について、清宮ほか(2020)では、大学生のスポーツボランティアに対する他律的な認識がスポーツボランティア活動への意欲を低下させることを明らかにしている。したがって、スポーツボランティアに対する他律的な認識は今後の「支える」スポーツ人口の増加に悪影響である可能性が高い。

では、なぜスポーツボランティアに対して他律的な認識を持ってしまうのか。本研究の開始当初は3つの仮説を立てた。

1つ目は、メディアを介した印象である。昨今では2020年東京大会のボランティアを巡り、「感動」を共有して人々を肯定的な参加へと駆り立てるような動員の力を「参加型権力」と批判する小笠原・山本(2019)や無償性を前提に学生の募集を行うのは「学徒動員」と批判する本間(2018)の議論が表出している。このような「ボランティア=動員」などの報道が人々のスポーツボランティアに対する認識に影響を与えていると考えられる。2つ目は、教育による印象である。日本では1996年以降、教育の中にボランティアが導入され始めた。中央教育審議会(1996)の「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」の中では、ボランティア参加を推奨し、「我が国の文教施策」(文部省, 1998)では、大学と高等学校の入学選抜において、ボランティア活動を適切に評価するよう配慮を求めている。しかし、小・中・高等学校の授業の一環としてのボランティア活動体験は大学入学以降のボランティア活動に結びついていない(荒川, 2008)。このように授業評価や進学のために行なったことがボランティアを他律的と印象付け、スポーツボランティアにも影響を及ぼしていると考えた。3つ目は、日本の風土である。内閣府が実施する「第8回世界青年意識調査」や「我が国と諸外国の若者の意識に関する調査(平成30年度)」では、いずれも日本の若年層が諸外国と比較してボランティア活動の実施率が低く、またボランティア活動に興味がない傾向を示している。したがって、日本人の特性上、スポーツボランティア活動への参加には他律的な傾向になることが予想された。

## 2. 研究の目的

本研究は上述した仮説(メディアによる影響, 教育による影響, 日本の風土による影響)を検証するため、大学生に着目し、スポーツボランティアに対する他律的な認識の形成理由を明らかにすることを目的とした。

## 3. 研究の方法

本研究は、社会調査会社に委託し2度の量的な調査を実施した。

### (1) 2021年度の調査

本研究の仮説であるメディアによる影響と教育による影響を検証するため、日本の大学生を対象にアンケート調査を行った。対象者の選定条件を「スポーツボランティア活動の経験を有した大学生」と設定し、約400名のデータを収集した。

### (2) 2022年度の調査

本研究の仮説である日本の風土による影響を検証するため、アメリカ合衆国の大学生を対象にアンケート調査を行った。対象者の選定条件を「スポーツボランティア活動の経験を有した大学生」と設定し、約600名のデータを収集した。

## 4. 研究成果

以下に本研究の仮説に基づいて、いくつかの主な研究成果をまとめて示す。

### (1) メディアによる影響について(図1)

調査対象者に「『東京2020大会』に関する記事やニュースがあなたのスポーツボランティアに対する他律的なイメージに影響を及ぼしたか」と質問した結果、「非常にあてはまる」1.9%、「かなりあてはまる」4.3%、「ややあてはまる」19.8%となった。

また、「メディアを見て、スポーツボランティア活動が他律的だと思ったことがありますか」

と質問した結果、「非常にあてはまる」1.3%、「かなりあてはまる」4.7%、「ややあてはまる」18.6%となった。

調査結果を概観すると、約 2 割の大学生がメディアによる影響でスポーツボランティア活動に対して、他律的な認識を抱くようになったことが明らかになった。

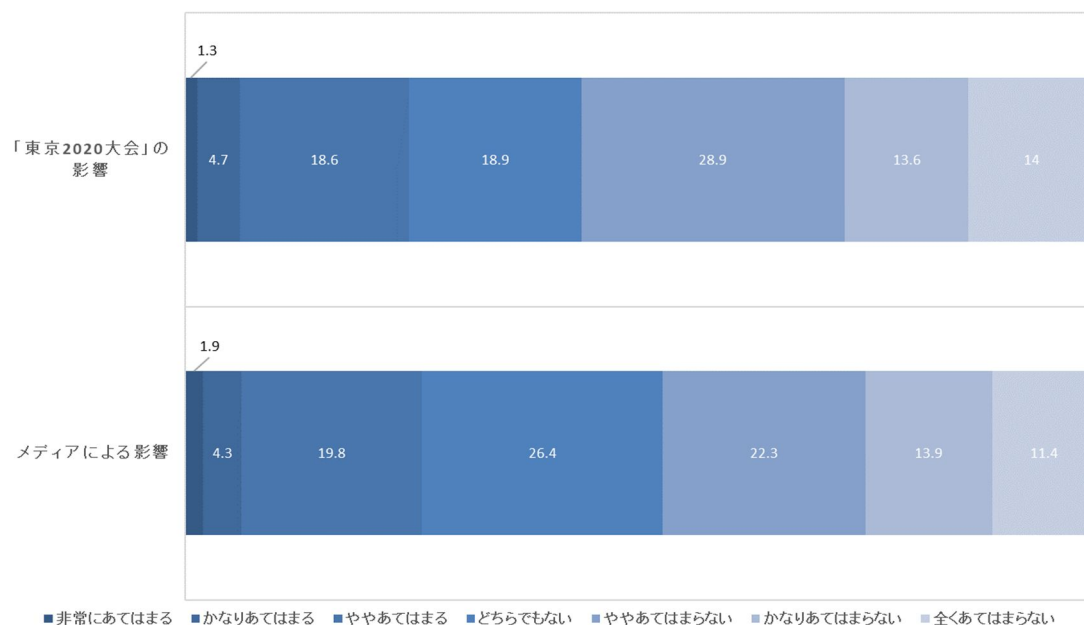


図1 メディアによる影響

## (2) 教育による影響について(図2)

調査対象者に中学や高校の時に「授業評価のため」「進学のため」「部活動のため」「学校の先生」「学校行事」の5つの場面で「強制的にスポーツボランティア活動を行った経験があるか」について、質問した。「非常にあった」「かなりあった」「ややあった」を合計すると、「授業評価のため」20.7%、「進学のため」21.7%、「部活動のため」32.3%、「学校の先生」29.8%、「学校行事」38.0%となった。

また、スポーツボランティアに対して他律的な認識を持つ調査対象者に対して、その理由を自由記述方式で質問したところ、運動部活動の指導者(顧問や監督、コーチ等)から、スポーツボランティア活動へ強制的に参加させられた経験を持っていることが明らかになった。その他にも、学校教育の一環で実際に参加したスポーツボランティア活動で「運営側からの指示」に他律的な印象を持ったことが示された。

したがって、スポーツボランティアに対して、他律的な認識を有している大学生は、学校教育において、他者からの依頼や提案で「強制的」にスポーツボランティア活動に参加した経験を持つ者が一定数存在していることが明らかになった。

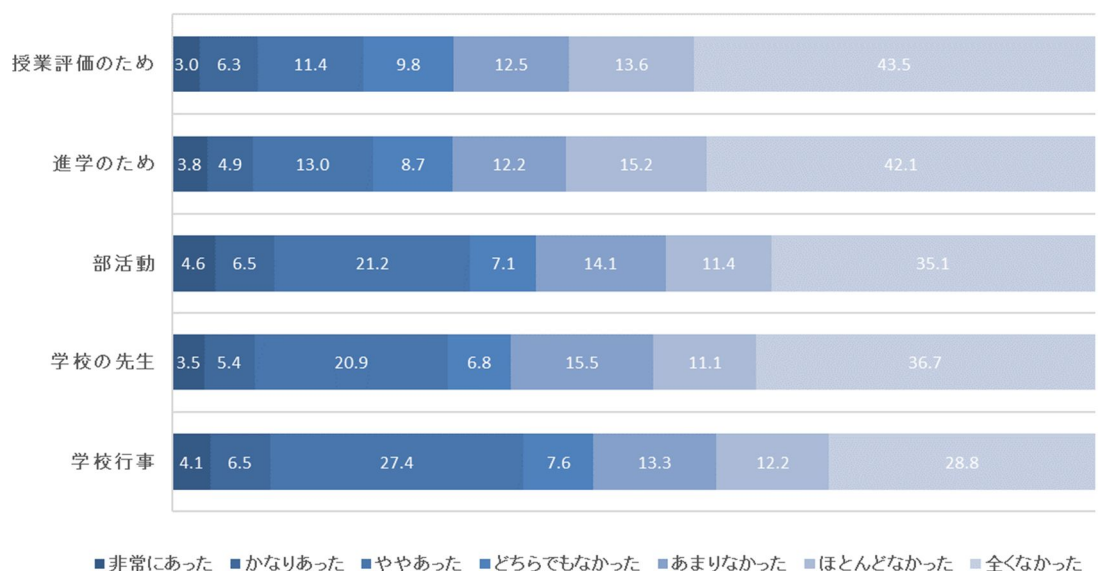


図2 教育による影響

### ( 3 ) 日本の風土による影響について ( 図 3 )

内閣府 ( 2019 ) の「令和元年度版 子供・若者白書」によると、ボランティア活動に最も興味がある国は、アメリカ ( 65.4% が「興味があると回答」) であった。一方、最も興味がない国は、日本 ( 33.3% が「興味があると回答」) となっている。そこで、日本とアメリカの大学生でスポーツボランティアに対する認識の比較を行った。尚、比較に使用した項目は、清宮 ( 2020 ) で構造化された質問項目であり、「非常にあてはまる」～「全くあてはまらない」までの 7 段階リッカート尺度を用いた。

各因子の平均値を算出した結果、アメリカの大学生の方が利己的因子と他律的因子で有意に高い値を示した。また、利他的因子は日本の大学生の方が高い値を示したが、統計的な差異は見受けられなかった。したがって、日本人大学生よりもアメリカの大学生の方が、スポーツボランティア活動を他律的に認識しているが、利己的な認識を持っていることがスポーツボランティア活動への興味に繋がっていることが示唆された。

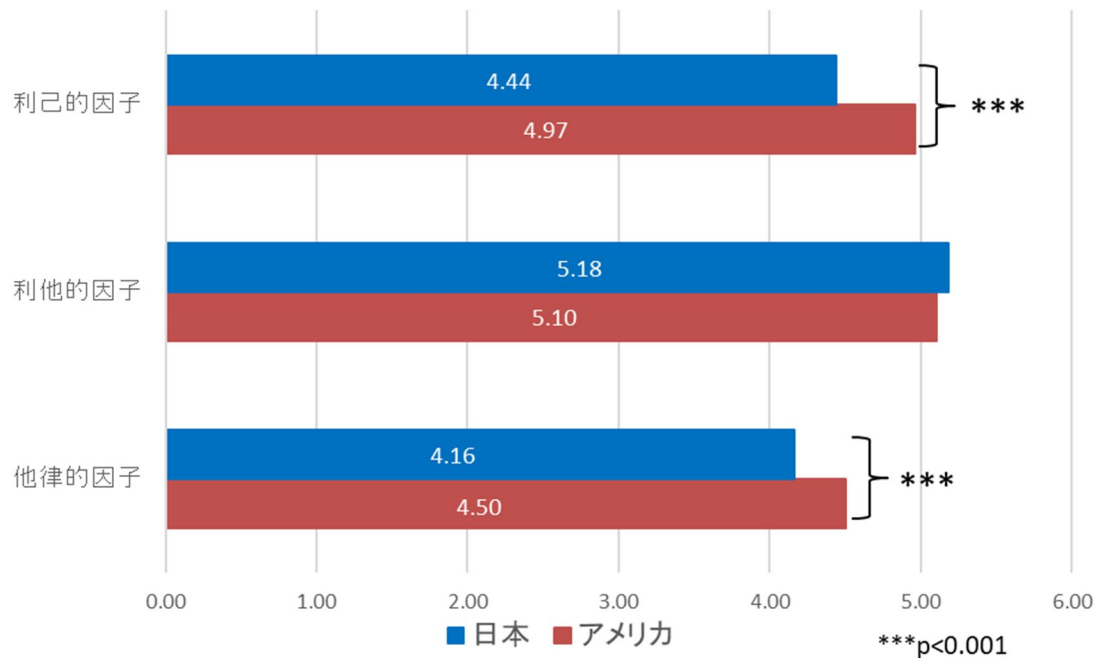


図3 日本とアメリカの認識比較

### ( 4 ) 今後の展望

本研究では 2 つの課題が残った。まず 1 つ目は、仮説としたメディアと学校教育のスポーツボランティアに対する影響である。一定数の調査対象者がメディアや学校教育の影響により、スポーツボランティアに対して他律的な認識を有したことが示唆された。しかし、全ての対象者の形成理由を明らかにするには至らなかった。他の要因について、さらに検討を続けるとともに、今後はスポーツ以外のボランティア活動と比較し、スポーツボランティアの特性や特色を明確化していきたい。

2 つ目は、日本風土の影響についてである。ボランティア活動に興味がある国としてアメリカを選定し、日本の大学生との比較を実施したが、アメリカの大学生の方が他律的な認識が高いという仮説とは反対の結果が出た。一方で、利己的な認識も日本大学生より高かったことから、アメリカの大学生は、他律的な認識とスポーツボランティア活動への参加意欲が関連しないことが示唆された。今後は、アメリカの大学生のスポーツボランティア活動への動機付けを明らかにしていきたい。

### 参考文献

- 荒川裕美子 ( 2006 ) 小・中・高等学校におけるボランティア体験と大学生のボランティア観の関連, 川崎医療福祉学会誌, 16 ( 1 ): 133-139.
- 中央教育審議会 ( 1996 ) 「 21 世紀を展望した我が国の教育の在り方について」, [https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chuuou/toushin/960701.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chuuou/toushin/960701.htm) ( 参照日: 2023 年 6 月 15 日 )
- 本間龍 ( 2018 ) ブラックボランティア. KADOKAWA: 東京.
- 清宮孝文, 依田充代 ( 2019 ) 大学生のスポーツボランティアへの参加・不参加動機: 体育系大学生に着目して. 運動とスポーツの科学, 25 ( 1 ): 21-28.
- 清宮孝文・門屋貴久・依田充代・阿部征大 ( 2020 ) スポーツボランティアに対する認識と参加意欲の関係性: 体育系大学生に着目して. 運動とスポーツの科学, 26 ( 1 ): 1-14.

小玉京士郎・早田剛・相澤徹・河合洋二郎・村重良一（2016）障がい者スポーツボランティアに対する意識調査．環太平洋大学研究紀要，10：237-242．

小笠原博毅・山本敦久（2019）やっぱりいない東京オリンピック．岩波書店：東京．

文部省（1998）我が国の文教施策，大蔵省印刷局：東京．

内閣府（2009）第8回世界青年意識調査，  
<https://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/worldyouth8/html/2-4-3.html#1>，  
（参照日：2023年6月15日）．

内閣府（2019）令和元年度 子供・若者白書，日本の若者意識の現状，  
[https://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/r01honpen/s0\\_1.html](https://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/r01honpen/s0_1.html)（参照日 2023年6月15日）．

内閣府（2019）我が国と諸外国の若者の意識に関する調査（平成30年度），  
<https://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/ishiki/h30/pdf-index.html>（参照日：2023年6月15日）．

田引俊和（2008）障害者スポーツを支えるボランティアの参加動機に関する研究．医療福祉研究，4：98-107．

山口泰雄（1998）ボランティア活動の広がりと「スポーツを支える活動」の振興（特集 オリンピックと我が国スポーツの振興）．スポーツと健康，30（6）：23-25．

5．主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1．発表者名 清宮 孝文
2．発表標題 大学生のスポーツボランティア活動に対する他律的な認識に関する一考察
3．学会等名 日本体育・スポーツ・健康学会
4．発表年 2022年

1．発表者名 清宮 孝文
2．発表標題 スポーツボランティアへの他律的な認識に関する探索的研究 大学生経験者に着目して
3．学会等名 日本体育社会学会
4．発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

本研究の結果は、今後、論文として投稿予定
----------------------

6．研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------